

軽症例の実態調査に関する研究

研究分担者 三村 治 兵庫医科大学神経眼科治療学特任教授

研究要旨

眼瞼痙攣・片側顔面痙攣に対するボツリヌス毒素注射の
長期的な有効性の検討を行った。

A．研究目的

原因不明の局所ジストニアの代表的疾患である眼瞼痙攣（BS），顔面神経への機械的圧迫で生じる器質的疾患の片側顔面痙攣（HFS）は，発症機序が異なるにもかかわらず両者ともにA型ボツリヌス毒素（以下BTX-A）注射が有効である。この両者のうち10年以上BTX-A治療を続けている難治例の診療録を後ろ向きに検討し，その長期にわたる治療効果が病態によって異なっているかを検証する。

B．研究方法

兵庫医科大学病院で過去10年以上にわたってBTX-A治療を継続したBS患者72例及びHFS患者86例の診療録を後ろ向きに解析した。評価項目は1か所当りの注射量，1回の治療当たりの総注射量，注射間隔である。

（倫理面への配慮）

研究計画に関して兵庫医科大学倫理委員会の承認を得た。

C．研究結果

初回の1か所当りの注射量はBS，HFSとも2.5単位で，時間の経過で変化しなかった。BSに対する最初の5回（初期）の平均総注射量は 31.94 ± 3.06 単位で，

最後の5回（後期）の平均総量は 36.76 ± 6.59 単位であった（ $p < 0.001$ ）。一方，HFSでの初期の平均総注射量は 16.6 ± 2.4 単位で後期は 9.3 ± 4.77 単位であった（ $p < 0.001$ ）。さらにBSの初期注射間隔は 3.3 ± 1.2 か月で，後期は 4.1 ± 1.7 か月であり（ $p = 0.0002$ ），HFSでは初期は 4.5 ± 1.4 か月で後期は 6.6 ± 2.7 か月であった（ $p < 0.0001$ ）。1か所当りの注射量は時間と共に変わらないが，治療当たりの総注射量，注射部位数と平均注射間隔は初期から有意に増加した。

D．考察

これまで難治性眼瞼痙攣は長期経過ではしばしば重症化や治療効果の減弱がみられるとされてきた。しかし，今回の結果からBTX-A治療は注射量の増加はあるものの長期にわたって二次耐性を起こすことなく寛解の維持と注射間隔の延長がみられた。

E．結論

我が国においても頭頸部局所ジストニアの代表的疾患である眼瞼痙攣は，長期にわたって継続治療する必要があり，しかもBTX-A治療により効果的な寛解の維持と注射間隔の延長が得られる。

G．研究発表

1. 論文発表

三村治，木村亜紀子，一色佳彦：難治性眼瞼痙攣患者に対する上眼瞼手術の検討。神経眼科 2017：34巻（掲載予定）